

対照言語行動学研究会（JACSLA）第 20 回記念大会 研究発表 概要

2022. 10. 8 開催 於 神奈川大学 みなとみらいキャンパス

タイトル	主題がないように見える文の様相—新聞社説を中心に—
著者名（所属）	石出靖雄（明治大学）
連絡先 E メール	Yishide[ <a href="mailto:Yishide@meiji.ac.jp">@</a> ]meiji.ac.jp
<p><b>論文内容</b></p> <p>日本語の文は、主題のある有題文と主題のない無題文とに分けられる。主題とは、日本文法学会編（2014）『日本語文法事典』では、「文中のある要素を提示する成分で、後続部分とともに「～については～」という関係を表すものをいう。助詞の「は」によって表されるのが代表的である。」（丹羽哲也 執筆）としている。</p> <p>この記述に従って主題をとらえたいうで、実際の文に主題があるのかどうかを調査すると、判断しにくい場合が出てくる。主題が省略されていると考えられることもあり見かけ上は無題文であるが、有題文と考える方が適切だと思われる例が見られるのである。例えば、「勉強する必要がある。」（作例）という文では、主語と述語動詞があり何も省略されていない無題文のように見える。しかし、この一文だけではどのような事柄なのか理解することは難しい。この文に「今度の試験に合格するためには、勉強する必要がある。」のように「～には」という情報があれば、まとまった事柄として理解することができるようになる。そして、「～には」が補われると有題文となる。実際に一文の中に「～には」という情報が明示されなくても、それは文脈から理解できるためにわざわざ書かれてはいないだけということが多い。このように、見かけ上は無題文に見えるが、文脈の中に主題相当の情報があるような文を、暫定的に「見かけ上の無題文」と呼ぶこととする。</p> <p>本発表では、丹羽等の先行研究を踏まえたいうで、有題文・無題文を文章・談話レベルの問題としてとらえ直し、特に無題文という用語の範囲を定め、実際にどの程度無題文が現れるのかも調査した。</p> <p>その結果、次の3種類の文の場合に「見かけ上の無題文」が想定され、また、無題文は有題文に比べて出現する割合が少ないことが確認された。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・二重主語構文と考えられるが、一つの主語が省略されている。</li> <li>・述語動詞の必要とする名詞格が足りない。</li> <li>・述語部分が主題になっている。</li> </ul> <p>さらに、いままで詳しく規定されていなかった、略題、状況陰題、転位陰題について、実際の文章の中での位置づけを行った。</p> <p><b>参考文献</b></p> <p>石出靖雄（2021）「主題のない文の現れ方 近代短編小説の場合」『早稲田大学日本語学会設立 60 周年記念論文集 第 2 冊』 pp. 135-151 ひつじ書房</p> <p>丹羽哲也（1988a）「有題文と無題文、現象（描写）文、助詞「が」の問題（上）」 p. 41-58 『國語國文』 57（6） 京都大学文学部国語学国文学研究室</p> <p>丹羽哲也（1988b）「有題文と無題文、現象（描写）文、助詞「が」の問題（下）」 p. 29-49 『國語國文』 57（7） 京都大学文学部国語学国文学研究室</p> <p>三尾砂 （1948）『国語法文章論』三省堂、（2003）『三尾砂著作集 I』 pp. 3-80 ひつじ書房 所収</p> <p>三上章 （1960）『象は鼻が長い』くろしお出版</p>	